胡蝶物語

前栽―庭

胡蝶物語

中比の事にやありけん、都近きあたりにこてふと云へる人あり。いかなる故にや、此人は妻をもかたらふ事なかりければ、愛すべき子もなく、只春秋の花にうき身をやつし、色色さまぐ〳〵の草木の花の種を集めて、前栽にうゑおき、是を樂みければ、京わらんべども此人を胡蝶と名づけけるなり。胡蝶一人の母をもちけるが、世にこえて孝行をなし、いつきかしづきしに、五十ぢあまりの秋の比、假初の風の心地とていたはりつき、程なく十日がうちに空しくなりぬ。此人よその歎きにだに深くいたはる人なれば、まして恩愛深き一人の母に別れし事なれば、天に仰ぎ地に伏し、是を歎き悲みけれども其甲斐なし。誠に會者定離の習ひなれば、誰かこの道をのがれぬべきと思ひとり、せめての事に花園にいでて心を澄ましけるに、あしたに盛なりし花のゆふべにうつろひ、夕露を含みて笑める花も明くる日影に散り萎れぬ。誠に盛者必衰の掟まのあたりなり。世の中の人の榮

須彌の四洲―須彌山の四方にある南贍部洲、東勝神洲、西牛貨洲、北倶盧洲をいふ

しせつ―結夏、解夏、冬至、元旦の年中四大行事を四節といふ

え衰へも又かくの如し。須彌の四洲の中にも、此世界は老少不定の境なれば、一代教主の釋迦ほとけ末世の衆生に生死無常の定めなき事を知らしめ給はん御方便に、淨飯大王の后摩耶夫人の胎内をかり給ひて、假に人間に生れ悉陀太子と申し奉りしが、十九の年の御年より發心修行の御志ありければ、御父淨飯大王これを歎き思召して、いかにもして御心を慰め給はんために、都のまはりにしせつの四季を學び給ふ。太子は之を叡覽あるに、まづ東表に出で給へば、改まりぬる春の空、こち吹く風にさそはれて、梅が香ふかき山の端に咲き亂れたる初櫻、今をさかりと岩つゝじ、松にかゝれる藤波の、よせくる井手の山吹も、散り亂れつゝ飛ぶ蝶の、はかなき夢や賴むらん、霞の籬隔てつゝ百囀りの鳥の聲、きくも長閑けき景色なり。されども時移りなば花も散りうつろひなん、誠に是も菩提の種ぞと思召し過ぎさせ給ふに、南表を見給へば、常磐堅磐に繁りあひ、卯の花さける木の間より、歸らんには如かじと鳴きすてて行く時鳥、あとなつかしき橘のかをりも深き紫の、雲をひたすか澤水に、色も異なる杜若、風さへ薫る蓮の絲の、濁りにしまぬ御心地にて是にも更にめで給はず。西を遙に見給へば、秋の景色のいろ〳〵に、千草の花の咲きつゞく、裾野の原の絲薄、結びもとめず散る露に、萎れて蟲の聲さやぐ、鳴きすがるに

もいとどなほ、秋の哀は知られけり。入り日の殘る山の端に、錦をさらすもみぢ葉も、色濃きよりや散りぬらん。曉かけて小男鹿の妻戀ふ聲を聞くにつけても、煩惱の闇に迷ふらんと打詠め給へば、やう〳〵秋も暮れ、冬のけしきに變り來て、木の葉をさそふ北時雨、尾上も峯も白妙の、雪ふりうづむ炭竈の、煙たえたる山賤の住みかも思ひ知られつつ、いとど哀はまさりけり。是を見彼を見るにつけても、皆菩提の種ならずといふことなしとて、いよ〳〵發心修行の御志深く成り給ひて、十九の御年の八月十五日の夜、内裏を忍びいで給ひて、こんでい駒に召され、舍匿大臣一人召しつれ、檀特山のさかしき路を凌ぎ給ひて、阿羅々仙人を師と賴み、やがて菩提樹のもとにて御飾りをおろし給ひて、花の袂をひきかへ麻の衣に御身をやつし、御名をば瞿曇沙彌とぞ申しける。曉は谷に下りて閼伽の水を汲み、晝はひめもす峯に上りて花を摘み、つま木を採り、夜はよもすがら座禪の床に御まなこをさらし、衆生濟度のために難行苦行し給ひて、終に正覺ならせ給ふ。昔は淨飯大王の御子悉陀太子と申せし、今は三界獨尊の釋迦如來と現れ給ひ、一切の衆生有情草木國土まで、成佛の緣を結び給ひて、御年八十にして二月中の五日に、頭北面西に臥し給ふとかや。されば三世了達の御佛だにも、無常の掟はのがれさせ給

こんでい駒―馬の名、金泥、乾陟、などの字をあつ
舍匿大臣―大臣とあるいぶかし、童子、舍人などいふが常なり

三世了達―過去現在未來の三世を分明に達觀すること

うつつら―提婆尊者と交際ありし嗢呾羅（ウツタラ）をいふにや

悲願―佛が衆生のために大慈悲を起し願を立て行を修し諸願を満てたまふ意にて卽ち諸佛の誓願をいふ

はず、況や人間においてをや。東方朔が九千歳、うつつらの八萬歳も名のみ殘れるばかりなり。かゝる敎をうけながら、色にそみ香にめでて、二度輪廻の業にかへらんこそ淺ましけれと思ひ定めて、前栽に植ゑおきし花にも心をとめず、日比あつめおきし資財雜具をも打棄て、麻の衣の墨染を身にまとひ、東山のかたほとりに草の庵を結び、夕べには眞如實相の月をすまして、春の花のうつろひ、秋の木の葉の散りつくすにつけても、いよいよはかなき世の有樣を觀じて、

生けるもの草木のみかは何かさて此世に殘る物やあらなん

かやうに口すさび、淸水のかたを眺めやり、南無大慈大悲の觀世音、悲願たがへ給ふなと伏し拜みけるに、南にあたりて煙ほのかに見えければ、げに是は鳥部野にてぞあるらん、主は誰ともしら雲の消えてさきだつ夕烟、いつ身の上になるべきぞや　末の露本の雫と詠じける彼の遍昭が言葉も思ひいだされて、いとあはれなりければ、

見ればげに心細くも鳥部野に絕えぬ烟のあけくれの空

誠に朝には紅顏ありて世路に誇るといへども、夕べには白骨となりて、郊原に朽ちぬとつらねおきしも、今一入のあはれをぞ催しける。さる程に夕陽西に傾き、遠近の寺々の

鐘さだかに聞えければ、又もや聞かん入合の鐘と詠ぜし歌を思ひいだして、

いつのまにけふの日もはやくれはどりあやしき程の入相の鐘

かやうに折にふれ事に隨ひ、心を澄まし明かし暮らし給へば、都のうちは云ふに及ばず、近國他國の者までも傳へ聞きつゝまうで來り、この聖を拜し奉り、末世の衆生を助け給はんとて、彌勒佛の生れ來り給ふと云ひならはしけるが、おのづから彌勒上人とぞ人の申しける。あまりに人の多く集りければいとはしく思ひ給ひて、

聲をきゝ色を見るにも世の中に心とまらぬ墨染の袖

ひとり世をのがれてすめる庵なれば軒もる月もいとはしきかな

かくて猶も浮世遠からん方をもとめんとて、北山の奥へわけ入り、人氣稀なる峯に柴の庵を結び、行ひすましておはしけるに、或夜夜半ばかりに柴の編戸をほと〳〵と叩く音す。野分の風のさそふにやと思ひ、ともし火をかゝげ心を澄まし聞きゐたるに、重ねて物申さんといふ音す。晝だに人のおとづれざるに、いかなる者の來るべき、只天魔破旬のわが道心を妨げんとて來るらん、よし何者にてもあれ、澄ましつる心の月は曇らじものをと思召し、誰なるらんとの給へば、これはこのあたりの者にて候ふが、元より罪業

五逆十惡―前に いづ

深き女の身にて候へば、今上人の御教をうけ、後の世を助かりまゐらせんと思ひ、これまで參りて候ふといふ。聖聞召し、仰せはさもあるべけれども、かやうに世を捨てはてたる庵の内へ、女人の御身なるに、しかも夜更けていかで入れ申すべきぞ、急ぎ歸らせ給へと仰せければ、此女房きょて、上人の仰せにて候へども、罪深き女の身にて候へばこそ法の庭には近づき候へ、五逆十惡のもの、女人、非情草木までも助け給はんとの佛の御誓願にて候はずや、そのうへ我身かやうに老いたる尼の事にて候へば、何か苦しかるべきとて、かづける衣を引きのけたるを、柴の編戸のひまよりもさやけき月に見給へば、六十に餘りたるらんと思しき尼の、薄青の衣に練貫かみにうちかづき、露にしをれてイみたり。聖見給ひて、さては苦しからぬ者ぞと思ひ、柴の編戸を開き給へば、此尼やがて内に入りぬ。

聖仰せけるは、このあたりの人と仰せ候ふが、こょは人里遠き所なるに、夜ふけてしかも女の一人渡らせ給ふこと、かたぐ〜不審にこそ候へと仰せければ、誠は五條あたりの者にて候ふ、都にては常に參り仕へしことの候ひし、昔を語り申さば思召しあはする事の侍るべし、それはまづさしおき、かょる迷ひ深き身のゆくへ、一偈一句の御示しをも

受けまゐらせんために、これまで參りて候ふと申すところへ　又年の程は二八ばかりなる女房の、柳色の衣きて、薄紫の小袖上にかづき、する〳〵とさし入り、彼の尼君の脇に直り、みづからも御跡を慕ひまゐり候ふ、五障三從の雲厚うして眞如の月を澄ますことなし、今遇ひ難き緣にひかれて、是まで參りたるこそ嬉しう候へ、いかさまにも上人の御教にまかせ、末の闇路をはらしまゐらせんとて、露に萎れ涙にむせびてぞ禮拜しける。かゝる所に又十四五ばかりなる女の、薄萠黃の衣きて黃なる小袖うちかづき、足たゆく内へ入り、いと面はゆけにて尼君のそばに打ちそばみてぞ居たる有樣、いはん方なくらふたけて見えける。聖御覽じて、いかなる人々なれば召しつれらるゝ人もなくて、かく淺ましき庵の内へは渡らせ給ふぞとの給へば、かの女房しばしは御返事をも申さでやゝありて、みづからは父母もなき孤兒にて候ふが、いとけなき時より物思ふ事絕えやらで、道芝の露とも消えぬべく思ひつるに、繫がぬ月日たち行くまゝに、いとゞ思ひはます鏡、面影にたつ父母のことなつかしき明暮は、煩惱の垢あつく積り、拂ふ心の風絕えて、猶妄執の雲霧を、いかにもして晴らしやせんと來り侍るなり、上人の御値遇にひかれ、輪廻の業を免れ、父母われら諸共に無爲法樂の臺に到らんと思ふ心をしるべにて、方々の御跡

十二人の御局―天子に十二人の后ありといふよりいふ

を慕ひ參り候ふと、涙に咽び申しければ、聖も尼君も墨染の袖をぞ濡されける。又そのあとよりつゞき、二十ばかりなる女房の二十四五人いざなひ來るを見れば、いづれも花を飾りたる有樣なり。

あるひは紅に白き袴をき、白綾に紫の袴ふみしだき、十二重の衣に花づくし縫ひて、又唐綾、唐錦、色をつくして飾り立て、次第々々に竝みゐたり。中にも少し年たけたりと見えたる女房、上人に向ひ申すやう、これまで誘ひ參り候ふ人々は、御覽ぜられ候ふ如く、いづれも若く候へども、罪業深き女の身ながら、月花に心をそめて明かし暮らすのみにて、身の後の事をも知らず候へば、都のうちにていかなる知識をも賴みまゐらせ、御示をも受けまゐらせんと思ひながら、心ならざる身の悲しさは、いつとなく打過ぎぬ、今この上人の御事世にすぐれさせ給ひて、たふとく有難き御慈悲とうけたまはり及び候へば、皆々これまで誘ひ參りて候ふ、かゝる愚痴の迷ひを夢ばかりはるけてたび候へとて、いとあはれげにぞ見えける。聖聞召し、こは不思議なる御事かな、方々の御有樣を見奉るに、只人ならぬ御よそほひなり、雲の上人にて御渡り候ふかや、十二人の御局の中にても、女御后にてもおはすらん、さらずば公家の中にても近衞殿か、九條殿か、二條、

多生劫―多くの生死をへたる遠き昔
方々の有様を―此下に脱文あるべし

一條、鷹司、伏見殿の姫宮か、菊亭、葉室、西園寺、その外家高き人の姫君なるらん、しからば玉の簾、錦の帳の内にて、常は琵琶を弾じ、琴を調べ、歌を詠じておはすらん、又假初の物詣などにも御輿車花を飾り、舍人雜色あたりを拂ひ、上臈、侍、御供申し、鞍馬の山の櫻狩、賀茂や八幡の物まうでなどにこそ出でさせ給ふべけれ、かゝるいぶせき柴の庵の内へ、しかも夜ふけ物凄き折ふし、御供申す人もなく、かちはだしにて來り給ふは、只人間にてはよもあらじ、愛宕の山の太郎坊、比叡の山の二郎坊、鞍馬の奥僧正が谷にすまひをなす小天狗の通力をめぐらし、此聖が心を迷はせて魔道へ引入れんとて來りたるか、さらずば此山にすむ虎狼野干のものどもが餓を助からんために、此僧をたばかり命を奪ひとり、しゝむらを服せんとて、女に變化て來るらん、よしそれとても力なし、たとひ魔緣の者なりとも、又虎狼野干にてもあれ、此界へ生をうけたらん者の、佛法に近づくは多生劫の緣ぞかし、一偈一句の功德にて、無量無邊の罪を滅し、佛果菩提に到らしめんこと疑ひあるべからず、方々の有樣を、佛の戒め給ふところを、あら〳〵示し申さん、まづ涅槃經に見えたるは、三千大千世界のもろ〳〵の男子の煩惱を合せて、女人一人の業障とすと說き給へり、あるひは又女人は地獄の使なり、長く佛の種を絶つ、

面は菩薩に似て、内心は夜叉の如しとも說かれたり、しかるによつてもろ〳〵の佛にも嫌はれ、十方の淨土へ生るゝことも叶はずと、一切の經々に嫌ひ疎まれたること其數を知らず、そも〳〵我朝は粟散邊地の小國とはいひながら、欽明天皇の御代にはじめて佛法此國に渡り、聖德太子これを弘め給ひしよりこのかた、佛法流布の國となり、惡魔外道おのづから退き、民の煩ひなく國おだやかなり、津の國天王寺を佛法最初の御寺として、比叡山延曆寺は傳敎大師の開闢、桓武天皇の御建立、藥師醫王の佛像あり、又南都の東大寺興福寺は三國一の大伽藍、聖武天皇の御建立、笠置の寺は天智天皇の御願所、高野の峯は弘法大師の御開闢なり、其外白山、立山、富士の嶽、戸隱山、釋迦の嶽、尊き山々峯峯寺々、靈佛靈社數を知らずおはしますが　峯をさかへ谷を限り、女人を深く嫌ひ戒め給ふぞかし、誠に內には五障の罪深く、外には三從のさはりありと聞く、又唐の白樂天が詞にも、人生れて女人の身となること勿れ、百年の苦樂他人によれりとあり、誠にかやうに內典外典に嫌はれ、かく淺ましき罪業の人々の、いかで佛に成り給ふべきを、釋迦如來の御慈悲の有難さは、一念隨喜の功德して無量ざいの罪を滅し、卽身成佛と說き給ふ、又法華の名文に、草木國土悉皆成佛とも說かれたれば、有情非情に至るまで、皆佛性をう

醫王―藥師の一名

峯をさかへ―峯を境として

無量ざい―無量罪

六道四生―前にいヲ

けながら悪業煩悩の闇に迷ひ、地獄には墮つるなり、迷故三界成、悟故十方空、本來無東西、何所有南北ともあり、迷ひの故に三界の流轉あり、悟る故に十方も空し、本來の面目を明に見れば、東西も南北もあるべからずと思召し、心の玉を磨き給ふべし、たとへば悪業煩悩のおこることは大洪水の如し、いかにとしてこれを堰きとめんや、只其水を切り流し〳〵せば、終には水つきぬべし、その水に溺れぬれば卽ち地獄なり、是を以て地獄遠からず極樂まのあたりなり、さればをのこなりとも物毎に執著し、あるひは叶はぬ事を願ひ、又は戀慕愛執にひかれ、一念を切ることなきものは、六道四生に輪廻すべし、女人なりとも妄念を切りすてて、ひとへに佛に賴み給はゞ、何を疑ひあるべきぞと、さま〴〵に教へ給へば、此女房たちは皆隨喜の涙に袖をうるほし、上人を拜り奉り、あら有難の教化やな、忽ち輪廻妄執の雲晴れて、眞如實相の月おのづから澄める心地して、有難くこそ覺え候へ、御いとま給はり候へとて、皆々座を立ちければ、聖怪しく思召し、さもあれ方々はいかなる人々にておはしますぞ、御名のりあれと仰せければ、此女房達皆もとの座に直り、上人の仰せこそ御ことわりにて候へ、身の一大事を授かりまゐらせていつまで我名を包むべき、いで〳〵我名をあらはさん、我等は皆花の精にて候ふ、上人

都に御座ありし時は、あけくれ寵愛せられ申せしに、いつしか捨てられまゐらせて、其妄執深き故に、これまで参り御結縁にひかれて、佛果をうくる事こそ有難けれ、いざや面々のちまでの御かたみに、腰折歌なりとも一首づつつらね申さんとて、袂より短冊を取りいだして、

短冊―傍訓原本に従ふ

夕顔

聞きうくる法の光は玉かつらかけてぞ頼む花の夕顔

萩

思ひきや露を結べる絲萩のこよひし花の紐とけんとは

女郎花

つひに又消ゆべきものをあだし野の露をみなへし手向にやせん

桔梗

二つなく三つなく法を一すぢにきょやうくると尋ね來にけり

百合

あひがたき法の教は優曇華の花も心をゆりてこそ聞け

二つなく云々―此歌桔梗の字を隠したり、以下この類多し一々註せず

朝顔

はかなくも夕べを待たぬ朝顔の花の袂にかるゝ白露

菊

のりの聲きくより早く雲霧のはるゝ心の月ぞさやけき

山吹

うれしさに露を拂ひてこよひしも御法の庭にいでの山吹

絲薄

白露のたまゆら結ぶ絲薄みのりの雨に潤ひにけり

藤袴

ぬぎすてし薄紫の藤袴のりのゆかりを尋ねてぞきる

忍草

のりの聲聞く嬉しさのあまりにや忍ぶに堪へぬ我涙かな

刈萱

消えやすき露のうき身をかる萱の花に馴れつゝ願ふ後の世

撫子

なでしこと思ふ佛の惠みあれば及びなき身も賴もしきかな

仙翁花

いかにせんおふけなき身のかくばかり妙なる法の教なからば

小車

法の師にめぐりあひにし小車の花さへ笑める心地こそすれ

葵

あひ難き法にあふひの花かづらかゝる涙は袖にあまりて

菫

こよひ聞く法に心のすみれ草花もや笑みの眉ひらくらん

藤の花

紫の花にうつろふ藤波のよする汀や西の彼の岸

紫蘭

一すぢの道をしらんと尋ねきて法の教にあふぞ嬉しき

ゑむ―笑む、
しをん―紫苑、師恩

蓮（はちす）

心なき身もたのもしく思ふかな法の蓮のゑむに引かれて

紫苑

迷ひつゝ心の闇のおのづから晴るゝは法のしをんなりけり

深見草

深見草ふかく頼みをかけまくもかしこき法の教うけつゝ

末摘花

紅（くれなる）の色にそみても何かせん末つむ花のたむけならずば

紫陽花

あぢさゐの四ひらに咲ける花の枝折りて佛に手向にやせん

露草

露草の露の身ながら法の庭にたち交（まじ）りて頼むのちの世

蔦

蔦の葉のつたなき身さへ頼みあれや法の教の道たがはずば

葛

葛の葉のうらみもなどか殘るべき心の秋の風し立たずば

忘草

たをりつゝ三世の佛に手向して花に憂きをもいざ忘草

尾花

よろこびの涙なるらし片岡の招く尾花が袖の露けさ

荻

秋風にそよぎいでつる荻の聲もおのづからなる法のことわり

かやうに心々のさまを一首づつ短册に書きつけ、上人の御前にさし置き、御いとま申して立ちいづるかと思へば、柴の戸ほそをさそひくる嵐と共に、搔き消すやうに失せにけり。上人思召しけるやうは、かく心なき草木まで、和國の風俗を知りけるぞやと、いと有難く思召し、かやうに口ずさみ給ふ。

草も木も皆佛ぞと聞く時はたれかは漏れん法の誓に

かやうによみて裾野の原に立出で給ひ、座具をのべ香をたき、一切非情草木成佛とくわ

座具―僧の用ふる敷物
くわし―觀じの誤なるべし

し、暫く兩眼をふたぎゐ給へば、頃しも秋の草花の咲き亂れたる中に、時ならぬ藤、山吹、菫、蓮、其外さまゞの花の、今をさかりと匂ひ深く露を含みて月に色めき渡りけり。聖は御覽じて、さてはめんの體をあらはしけるぞと思ひ給ひて、煩惱卽菩提、生死卽涅槃といふ文を重ねて示し給ふ。たとへば煩惱と菩提、又生死と涅槃は水と氷との如し、又響と聲に似たり、しかれども煩惱は生死の源なり、かるが故に思ひのまゝに煩惱を起さば、生死つくることなし、されば只一心不亂の所にこそ涅槃の妙諦は讃歎すれ、過去の因によりて有情非情のかはりありとも、この妙文にひかれて佛果を得んこと疑ひなしと回向して、もとの庵室に歸り給へば、東雲の空もほのかに明けすぐるとかや。心なき草木のたぐひだにも、誠の道に入りぬれば佛に成ること疑ひなし。此草子を見給はん人は、慈悲正直を專らにして、貪欲邪見嫉慕愛執、もろ〳〵の惡業ほんの大敵のきほひかゝる時は、忍辱慈悲を楯につき、名號の利劍をもつて是を鎭め給ふべし。

めんの躰―めんめんの躰か女人の躰の誤なるべし

惡業ほんの―惡業ぼんなうの誤か